

1924年(大正13年)[20歳]

「辰雄日誌1924」No.5 (4)

— 1924年11月1～30日 —

小池辰雄

○1924年11月1日(土)

晴。午前、九段へ本を買いに行つた。『沙漠は番紅花の如く』藤井先生著。『聖書の研究』10月号。『実行的基督教』山室軍平大佐著。午後からは天候のあやしかったのと、眠いのとで、ぐずぐずしていた。晩、斎藤さんへお話しに行つた。兄上が宇都宮から帰つて来られた。久しぶりで賑やかな夜であつた。

○1924年11月2日(日)

晴。午前、隅田川へボートの神宮祭競技を見物に行つた。スカル、フィックス等も相当だったが、海軍のカッターのレースは実に勇壮で素敵だった。横須賀海軍機関兵、山城、比叡の乗組員のレースだったが、機関兵が1着、他の2隻は大接戦だった。3000mの長距離である。風と波と潮とに逆らつて帰つてくるときの力漕の雄々しさは実に壮絶であつた。

午後、青木へ行つて母上と共に帰る。母上は教会へ行かれたのである。5時、在京3日間は瞬く間にすぎて、水戸へ帰るべく立つた。車中は友なし。書く某に。窓外の星と共に。10時水戸着。すみわたつた夜の空に、星がチラチラ瞬いている。オリオンが東の空にのぼつて来た。天上の多くの友と黙然たるうちに愛をかわし、水戸市を歩きとおして、帰寮した。桐寮の電灯は赤々と照つて、内は寂然として声なし。僕一人である。外のものは未だ東京に居る。しずかに眠りについた。

○1924年11月3日(月)

快晴。明治神宮祭。祭日に授業を受けに行く愚行に我れながらあきれた。教室は入つた以上、アブハチとらずはよくないと思つたから、一生懸命になつたが、時々窓の外を見ると、その見事な空色と秋色に動かされて、心は野外に飛んで行く。また、遠く東京の空が思われて、神宮競技その他の催しを思う。散歩する。夜は一人。すると、10時頃、宣ちゃんが帰つて来た。大いに語り、10時半就床。ねたあとで、杉浦と近藤がかえつて来たのを4日の朝知つた。

○1924年11月4日(火)

晴。今日はいいい天気。フットボールをして汗をかきそう。昨日、病中お見舞下されたお礼として窪島様に菊植一鉢を送つた。黄菊大輪、7、8輪のもの。明治神宮祭当日とてふさ



わしき贈であつた。以て御親切に答えた。

グンデルト先生の篤学を見ては、我もまた勉めざるべからずとつくづく思った。まわりのものの情けについつい引かれて、心をゆるしていたのは大なる誤りであつた。僕はもつともつと勤勉なるべき人間である。

怠惰は最大の敵なりである。カーライルは怠惰を最も苦んだ。追われて勉強しようとは思わぬ。それはいやである。それくらいなら遊ぶ。勤むることが我が生命のあらわれであり、快事であり、神の命であるが故に勤むるのでなければならぬ。深く考えて誠に然りである。斎藤さんから戴いた腕時計(銀)は早速使っている。実に便利である。欲しいと思つていたのを突然、向こうから思いがけないときに下さったのは嬉しいことであつた。英国ロンドン滞在中に使つて居られたものとのことで尚更、大切な、意義あるものである。

松濤誠廉君(同級生)と心靈上のことを物語る。彼の求むるところが真面目なる人生を送らんがためなる故に、彼の考えが如何に、今のところ僕と合わなくとも、よき友である。大いに交わるべき良友である。僕の級中、彼は我が友であると思つた。

信仰の勇者として世に立てよ、辰雄。

林さんから送つて来た八ツ橋は、何年ぶりで食べるのだろうか。同心町の家に居たとき、戴いたことをおぼえている。彦九郎飴と云うのは初めてである。"Tolstoi auf dem Wege ins Unendliche."「トルストイ、無限大への道」と云う絵を額に入れた。

「なんじら義のそなえものを献げてエホバに依り頼め」(詩篇4・5)

○1924年11月5日(水)

晴。発火演習があつた。午前6時半起床。7時出発、内原に向かう。炊事係として行く。銃を持たぬ。10時頃、内原小学校に着いた。2里半。豚汁を作つて、昼供した。帰りは内原駅から乗車、水戸駅まで。帰りに入浴した。足の痛みも快く癒つた。時ならぬ銃声に鳥がおどろき立った。小学生が集い来た。好い散歩をした。空腹で随分お昼が美味だった。夜、トランプをして勝った。西洋史(マイアーのエイシエントヒストリー)は学校の勉強であるが、興味あつて面白い。

赤倉の北村忠一君——真の友——に音信した。彼の如き真面目に生きんとする人を友にして幸である。遠くに離れていて、かえつて近き友より親しくある。神、天然の崇敬者、純心の自然兒、彼は愛すべき人である。

○1924年11月6日(木)

晴。発火演習の翌日として授業2時間で、銃掃除、あとは休みである。自転車とキャッチボールをして午後は過ぎす。昨夜、友が深更まで隣室でダベッていたので、睡眠十分ならず。今日は少し頭がぼーつとしている。ダベルことほど害なることはない。精神を疲らせ、良



心を麻痺させている。人間は自ら麻痺の道、自滅の道をえらんで生活しているものの如く見える。まあ日常の人々の生活状態を考えて見よ、何たる迷えるものなるか。友達と話すのは決してわるくない。もつと有意な談話をなし、快活な笑をしてはどうか。そして、時間をキチンとくぎつて、パキパキと事をはこんでは如何。運動よし、勉強よし、談話よし、娯楽よし。ただパキパキと、きまりよくやるべきである。そこに青年の元気あり、得るところあり、生活あるのである。

夜は、宣ちゃんと窪島様へおよばれに行く。今年初めて、松茸の御飯をいただき、実に美味しかった。御親切な御方である。色々の御話や、蓄音機で9時、お暇ました。

有島武郎全集があった。彼有島氏の死は誠に背教者の死で惜しむべきことであるが、彼の純なりし頃の作品は読んで害なからんと思う。その中におかりして少し読もうかとも思った。クラーク教授のことを少し読んで感服、敬服せざるを得なかった。以て内村先生の昔を偲んだ。清き学生時代を送られ、よき基を得られたこと、実にクラーク教授にあずかつて力ありしと思つた。羨望にたえぬと共に、また感謝にたえぬは、内村先生を生んだクラーク教授。そのものと、主イエス・キリスト様に感謝である。バラの花をいただいて来て、机の上の一輪挿に入れた。

○1924年11月7日(金)

晴。暖かな天気であつた。フットボールは愉快だつた。機械体操で、しり上りの練習中である。未だ出来ない。腕の力が足りない。僕は思つた。僕は毎日、宗教書を読まざれば生きて居られぬ人間であることを。そして、この種の書を繙いているときは、僕の最も楽しい時、純なる心のときの一つであることを。

早く起きよ、快活に登校せよ。よく学び、よく遊べ。夕飯までは運動せよ。夕飯後は読書せよ。無駄に時間を費やすな、はやく就床せよ。とにかく、パキパキと、イキイキと、神の活発な子となって日々を働け。それで汝は最もよき道を歩むものであるのだ。

感謝なる、歡喜なる、讚美なる、基督降誕祭(クリスマス)の来らんことを。神に対して絶対服従の人々、故に人に対しては独立の人となれよ。従来 of 愚と罪とを再びすることなく、新生命に溢るる生活をなせよ。基督、我に能き給いて、我が愛は増し、智も深く、心強く、身体健全になるなり。

兄上の血、基督者の犠牲は水泡とならざるなり。我が母上、我が兄上、我が恩恵を蒙ること大にして深なる何にこれを譬えん。純真なる基督の僕となりて一生を終えるに非ずんば我に生くる価値なし術なし。過去は如何にもあれ、我は此の如く貴き犠牲によつて贖われたものなれば将来に於て必ず献身せん。

愛と血とを人類の為に。今晚の願い聴かせ給え。アーメン。



○1924年11月8日(土)

晴、明月。よろしく良書を繙かんと欲せば、これに対するに敬虔の念と謙遜の心と求むる心と忍耐の心とを以てすべし。己れを無にして静かに読むべし。これに味を加うるものは己れの経験なり、実験なり。而してはじめて良書は興味津津たり。然りまた然りである。おのずか自ら書と己れの霊とは合体するなり。凡人と語るより幾層倍、快事にして、有益にして自己を高め、力を与え、慰められ、励まされることよ。

敬虔なる人、謙遜なる人、人格者の講演を聞かんとするにあたつてもまた宜しくかくあるべきである。そのときは良書以上にある力を得るならん。良書、良講演は之、我が飢えたるとき食を求むるが如く慕うものなり。故に、日々、宗教書を読まずんば我が霊は枯るなり。良講演は之、実に一大精力素、一大御馳走である。我は飽くまで霊に生きんとする動物なり。肉に死なんとするものなり。願わくは、徹底的、献身的、基督者の生涯を送らしめ給わんことを。

山本の姉上様に一葉の葉書を送る。その終りに次の歌を書く。

「児童愛護の歌」

愛の衣に 智慧の乳 小児の無理は愛で解け。

小言百より慈愛の一言 叱る手をやめ 模範を示せ。

4時半頃、我が親友、松濤誠廉が自転車で訪れて来た。彼は相変わらずの活動振りで、汗を流している。彼は何を言いに来たか。僕に「宗教と科学」なる講演の今晚、茨城新聞社楼上で催されるから聞きに来ないかと云うことを報せに。彼の友情を深く掬んで、僕は「有難う」と礼を云った。彼は努力家である。奮闘家である。彼は9時頃までには大抵就床し、朝は4時頃起きるとのことである。そして、起きるやただちに勉強であると。彼は1里半ほどの遠方から毎日、自転車で通学している。常に澁刺たる青年の意気に溢れている。高校生にはめずらしき、勤勉にして活発な者である。

彼は真理を愛す、求む。而して僕も同じく真理を愛し求む。二人は、実行の人たらんことを求むるに於てまた同じである。彼が僕の宗教的なるを近頃知つて、驚いていた。そして、「宗教がなければ生きて居られない」と。以て、現代日本人のことや、高校生のことなどに關して慨嘆の声をもらした。彼もまた同意するのであった。現代の世にあつて、どうしても戦わずんばあらずである。奮闘せずんば救われずである。

午後7時からの講演である。途中、本屋に何気なく立ち寄った。『我国の実業家と基督教』と云う書が不図眼についた。一寸、開いて見た。すると、工学博士佐藤定と云う文字が眼に入つた。ハツと思つた。そして一寸その事業を一瞥すると、誠に敬服すべきものあるを感じた。松濤から「佐藤工学博士」と云う語を一寸耳にしていたので、「この人だな」と思つて、聴講せんと念は、燃えつつある炎に油を注いだ如く盛んになって来た。足はすたすたと新聞社の方へ向いた。7時10分前到着した。水高基督教青年会主催としてあつた。青年会の面々



にはどんな者(ひとたち)かと彼等を一寸見た。電灯は皎々と照っていたが、楼のあまりに広くないのに一寸気を落とした。佐藤博士は、聞けば今夜6時47分水戸着の列車で来られ、直ちに講演をされ、明日はまた神田の救世軍本部に於て講演をさるる由。多忙の御身である。勿論、研究事業の傍である。山室軍平大佐と知己の間柄であるとのこと。松濤も僕が入って5分ほどして来た。彼と共に聞いた。彼は半分冗談であろうが、「あらをさがしに来た」など云ったから、僕は厳肅に「そんな心で聞くな来ない方が好い」といった様なことを云った。

これとは別であるが、一体、日本人にはそういう気分で聴講するものがよくある。故に彼は如何によき講演を聞くと、それが何の益にもならぬ。講演終つて帰るさには、その講演者の、語尻をとらえて、嘲笑したりしている。ああ、かかる者多き現代の日本人を救うは難い哉である。この一些事を思つて誠に、我等は身体の奮闘を要するのである。松濤を責めるのではない。日本人一般のこのオチャラカシの気を撲滅せしめたいがためにの念ばかりである。

やがて定刻に、佐藤定吉博士、その人は来られた。一面、僕はその眼光人を射る如きに感じた。一体、熱烈なる信仰家、偉人と云うものは、眼光が普通の人間とちがう。奥光りのあるところがある。ことに演説が熱してくると実に鋭いものがある。彼は、もつと多数の聴講者あるを期して居られた如くあつた。僕も確かにもつと多数かと思つていた。彼は、高校生が多数居るかと思つたと言われた。水高基督教青年会員のもつと宣伝して置いた方がよかつたことを僕も思つた。もつとも、あまり熱心ならぬ彼等はそうは集まらぬかも知れないが。とにかく、楼がひろくないため、満場とはなつた。

社会になれぬと云うてよいか、勇気がないと云つてよいか、熱心がたりないと云つてよいか。聴くからには、どんどん前へつめたらよさそうなのに、とかく角や後ろの方にかたまる悪弊が日本人にある。家へ帰つては弱者にえびつたり、無遠慮をするくせに、かかるところで本当の熱心、勇気と云うものが欠けていることをすぐ暴露する。僕は真正面で聞いた。彼博士もこのことを演説の先に話された。恥ずべきことではないか。胸襟を開いて、赤裸々、天真爛漫なることに欠けている。妙な東洋氣質である。謙遜や遠慮のはきちがえである。基督者、紳士の到底なし能わざるふるまいである。故に、どうしても基督教、真の基督教の体得者は偉なる哉と思つた。

佐藤博士の御講演の大様は次の如くである。

Isaac Newton (1642～1727) は、万有引力を発見したとき、自分は海岸の貝殻を一つ拾つた様なものである。まだ多くの神秘がこの大宇宙には蔵されているのだと云つたということである。大自然の偉大には全く人間の小を感じざるを得ない。科学のかなたには大真理がひそんでいる。科学は実際に応用、活用されなければ何にもならない。金銀とてそれがあるものを購ひ得るが故に価値ありて、それ自身には価値は存しない。学問はそれ自身は



何の価値もない。皆、同理である。現代の日本の各階級は行きつまっている。世界が行きつまっている。一大絶壁に面している。ナイアガラ瀑布の上に浮かんで、落ちざらんとして漕いでいる小舟の如きものである。しかもその小舟は、次第次第にその167尺の絶大なる瀑布に徐々に近づきつつあるを知らぬものである。何ぞその危うき、到底、ある偉大なる力のあらざる限り救われぬものである。現代の社会状態、誠に此の如しである。精神上的の混乱状態である。

ひるがえって、人類の歴史を考えてみるに、有史以来6000年、その内、前3000年は殆ど文化のなき時代と云って差し支えない。それから文化の発明ありて、かなり文化の発達が目に見えてきたのが後の1500年である。そのまた半分700年、しかして、科学の発達を見たるは、17世紀の中頃、18世紀、即ち300年ほど以前であり、著しく発達したるは、最近50年である。しかも、最も顕著なるは最近5、6年である。実に科学の発達は極度と云ってよい位発達している。刻々と発見、改良、発明されつつある此の科学の時代に我々は居る。故に、我々の人生50年は決して短いものでなく、価値の十分にあるものである。故に、1時間とても大切なものである。

今晚の1時間、2時間も誠に大切なものであり、今晚この集会に来れるものと、今晚悪友に誘われたるものとは天地の差あり。一方は光明に、一方は暗黒へと正反対の方向に足を運ぶものである。我々は、どんな新生命に目覚めて、現代の窮状を救わざるべからざるものである。各人の己れに翻然として帰るべきときである。この意味に於て誠に大切な秋である。

ニュートンはある時、田舎の別荘へ行つて、読書していた。と、窓の外をながめた。彼は、すみ渡れる大空を仰いだ。そこには数多の星が運行している。月が上つては下る。彼は宇宙の神秘に胸をうたれた。そして、その見えざる力をいつか知りたいものだと思った。彼の心は実に偉大なる真理に向いていた。彼はものをみるにただNaked eyes〔肉眼〕を以てしなかった。Mental eyes〔心眼〕を以てした。丁度その頃である。彼は、真紅に熟した林檎のその枝からポタツと落ちるのを目撃した。と同時に非常なflash lighting〔閃光〕が彼の全身をピリツとさせた(ことと思う)。彼は見たのである。彼は肉眼でリングの落ちるのを見た。と同時に、心眼で偉大なる宇宙の力を見た。見えざるものを、力を見た。それは即ち引力であった。彼の偉大なる真理の発見はここに基づいた。これによって今日の科学は出来上がったと云って過言でないのである。万有引力、実に偉大なる発見である。宇宙は一つの真理によって初めて統一される。真理に二つはないのである。全宇宙を支配し給うもの誠に一つである。神の御力を発見したのである。我々を支配し、統御する力を見なければならぬ。それによらねばならぬ。

小さな物慾、利慾それは何である。皆、人を迷わし害するものである。自滅の道である。屈するは伸びんがためである。暗黒より光明へ。どん底より希望へである。車の轍にもが



く魚が大海へ放たれる如く、我々は自由の真理の世界におどり出ねばならぬ。

宗教は力である、愛である。学問と力。学問と信仰。信仰の上に立たざる学問は死である。やらぬがましである。信仰が根本である。而して初めて学問に生命が湧く。金銭もまた然り。不良の者金銭を持って自己を害し他人を害す。宝はその持つ人によらざれば害である。武器といえどもまた然り。

蛋白質は誠に栄養価値の大なるものであるが、生命なきとき、最も腐敗しやすきものである。生命ありて初めてものに価値を生ず。故に我々は宗教を、信仰を本として、日常生活をなさざれば、皆、空にして虚なるものである。

小菅の牢獄の話、囚人、渡辺某氏の、信仰に立ちかえりたる話。皆、涙ならざるはなかった。以て、如何に神の力の偉大なるかを知った。今日、新聞の三面記事は何を伝えるか。腐敗せる社会の現状の外に何をつたえるか。我々は、何をなすがよきか、何をなすが悪しきかを知る。しかして、かくせよ、かくなすな、と云うのが道德の教えである。しかし、如何にせばこれをなし得、如何にせば之をなさずに居られるか、と云う力を与えてくれるものは宗教の力である。神より賜る力である。これなくて、道德は誠にくるしき縄である。故に我々の根本は宗教に非ざるべからずである。宗教は我々が生きんために最初に必要のものにして最重要なるものである。この力ありて、金はあるもあらざるも、権はあるもあらざるも、あらゆるものはあるもなくも可である。よき根本あらば、それに用いらるるものはすべてよくなるのである。我々の生活は hypocrite (旅俳優、偽善者) の如く決してあるべからず。パウルの話。ギリシヤの残酷な処刑の話、などよく身に沁みた。

我々は心の底に常に、「我々は常に神の御前に言動をなすものなり」ということをよく銘じて置くを第一とする。表裏あるべからずである。神と共に歩むものである。真理の上に歩くものである。支那人の、井戸に落ちたる青年の譬え話。孔子、釈迦、基督を諷したる実によくわかつたのである。

基督は即ち、彼を救い出だし、「再びあやまつなかれ」と誠められた。十字架は何を意味するか。僕は彼の言外に深きものを得た。「宗教は力である。科学は武器である」。力なきときに武器は用をなさないのである。それは混乱にみちびくのみである。

博士の講演は、終始、力と愛と熱とに溢れていた。熱烈なる心の発露であつた。聴衆は感動した。僕も、消えんとする炎に膏を注がれたるが如く感じて、実に感謝の至りであつた。遠きを厭わずに出てきて実によかつた。3時間の勉強をするより、はるかにはるかに有益な時間をもつた。このことを知らざるこの先生に感謝し奉る。

基督者は知るも知らぬも、兄弟である。握手して感謝の意を表したくあつたが、それは出来なかつた。かく考えて僕は誠に心強くある。世界に知らざる親友を有す。しかしてこれは日常の友よりはるかに親しくある。神によって結ばれ居るが故に。ただこれだけである。以て、今日知らせに來たくれた松濤の友情に謝す。彼もまた帰りがけには雷に打たれたる



が如き面持ちで、光にかがやける眼をしていた。快くわかれた。彼の心に信仰の光の燃えんことをひたすら祈る次第である。

宣ちゃん、袋田へ旅行部の委員として旅行に(一泊)行った。彼若し今晚居りしならば伴い行くべかりしに、惜しいことをした。彼のためによき日の来らんことを祈る次第である。来がけに、松濤に栗をやるうと思ってポケットに入れて出たのを道で13、14の女のアンマが笛ふくのが誠にあわれにおもわれて、彼女に悉くやってしまった。このことは返って松濤に与えるよりも松濤の喜ぶことであつた。

感謝の夜の記念に丁度偶然にも見つかった本が、『我が国の実業家と基督教』と云うのであつた。それに、彼、佐藤博士のこと、美談などがのつていた。また、田中龍夫氏ものつていた。実に見事な月夜であつた。オリオンもプレアデスも喜々として瞬いていた。

○1924年11月9日(日)

晴。病も不幸も何物ぞ。我は神と共にありてのみ安らかなり。神、我に11貫[41.25 kg]を与え給う。我は感謝す。而して願う、神と共に在りて、更に1貫[3.75 kg]の報を与えられんことを。アーメン。

再びあやまつ勿れ。それは誠に愛に溢れた御言である。手づから救を下し給いて、而して再びあやまつ勿れ、とさとし給う。十字架にその血を以て罪を贖い給いしイエスの絶大の愛を知りて、我等罪人は何とこれに報ゆることが出来ようか。ああ、再びあやまつ勿れとお言われして、あやまつたのが僕である。しかも幾百回あやまつたか知れないのが僕である。昨日さとされて今日あやまつたのが僕である。罪人のかしらに非ずして何ぞ。ああ、罪のどん底より離れん離れんとして、離れ出でざる愚者は僕である。偽善者は僕である。すべての悪口をあびせかけられて未だ足りないのが僕である。我が霊は、エス様を慕うあまり、偶像を拝するにはあらざれど、彼の「祈りの場」を机上の額に入れざるを得なくなつた。暗黒に一縷の光明あり。我が眼はそれに。

神と共に歩くものなり、我は。アーメン。

神の御前にふるまうものなり、我は。アーメン。

真理の磐上を歩むものなり、我は。アーメン。

すべて信仰に基づかせ給え。アーメン。

富山茂、我が真友(基督者)のところを訪ねた。彼と快談すること2時間あまり。よき安息日であつた。昨日の講演を彼にもすこし伝えた。彼の行かざりしをやや惜しむものである。John Bunyan [ジョン・バニヤン] の Grace Abounding [恩寵満てる(自叙伝)] を彼から借りて来た。

○1924年11月10日 (月)

晴、月夜。日中は風吹きすさんでいたが6時頃、ピタツとないで、静かな月夜であった。「万国オリンピック大会」映画を見に行った。ハイスピードの写真が面白かった。岡部さんの話が面白くあった。体育の必要を、心身の鍛練を今更ながら感ずる。強健な忍耐力ある身体を国民一般に養生すること急務である。僕に於て最しである。

11貫〔41.25kg〕のこの身体は12貫〔45kg〕に先ずならねば駄目だ。目下の急務である。しかし急いではならぬ急務である。忘れて、自然の法則に則つて与えられるものである。故に急務にして焦心を要せざる。返つて神に立ち帰りて得られるものである。僕の身体は恵まれたる健全なるものである。之を害するは一切自己に罪があるのである。身体のことはいがことに非ず、問題に非ず。急務も何もない。神のことのみ我が関心、注心事である。母上あるを忘るる勿れ、兄上あるを忘るるなかれ、人あるを忘るるなかれ。父なる神のため、キリストのため、我は働くものなり。アーメン。

○1924年11月11日 (火)

晴。水を飲むこと2合。運動の後の井水はどうまいものはない。元来なら、こわくて飲めない僕もこの頃は、信念ありて井水も、時に当りては平気である。身体に段々、自信の衝いて来たこと何より感謝のことである。満月である。散歩をした。

○1924年11月12日 (水)

晴。日光の山々が白衣を纏まとうているのを登校の途すがらながむるは爽快である。雄々しきその姿を望みては、自ら凜然たらざるを得ない。今日もまた水を飲むこと1合5勺。カルピスを飲むこと1合。何だか味噌汁とか水とかが馬鹿に必要である。身体の要求である。神は正なるものを救い給う。神はたえしのぶものを助け給う。神は与えるものに与え給う。日々の生活に次第に真理の実際を得行くは何よりの信仰の糧である。

母上様、我が敬愛措く能わざる母上様は東京に信仰の生活を送り給う。我もまた水戸にて同じ神に仕え奉らんかな。よき報せをいただいて感謝。母上の鎌倉行きの恵まれたることとはどんなに之を聞いた僕の心を喜ばせたことか。御不自由な母上様に、神よ、御恵を施し給え。アーメン。明月皎々、星辰輝々。我、11貫を越ゆ。

○1924年11月13日 (木)

晴。……〔英文省略〕……。

多くの不信徒の中に、Christian lifeを送らんとす僕の苦しさ。神は荒野に放ち給えり。神、試み給う。その聖旨に叶わんため、常に「主にある」を忘るるなかれ。“Be not moved away from the Hope of the Gospel.”〔福音の希望から動き離されることなかれ〕人の様々の邪



魔を悉く切りぬけよ。我は日々、主より主の糧を戴かざれば生き得ざるものであります。
Moon-light Night.

○1924年11月14日(金)

晴後雨。晴天。基督教、汝は基督者に非ずや。実行の基督者、Be 基督者。我が一生は、何に非ずともただBe 基督者でありたくある。享樂主義者、歡樂に憧憬するものの団欒はサタンの巢なり、卵なり。我は関与せざるなり。

霹靂雷雨、一過す。勉めよ、怠惰は汝の敵なり。煩悶、苦慮することなし。何となれば汝は神によつて導かるる者なればなり。徹せよ、確乎たれ、神によりて。

病的に何か食べたくなつたときに、僕は聖書を開く。『聖書の研究』を読む。『旧約と新約』を繙く。宗教書を読む。これは僕の心をサタンより帰して、エホバの許に至らしめ、全くおちつき、神の言を求めんとすることややに強くなり、食のことは飛んで行つてしまふ。しかしこれもまた不安なることを知る。もし書なきときは如何。祈祷、これによらずして、真の平安はのぞまないのである。神との静かなるお話、これがなければ、真の歩みはなし。真の基督者に非ずである。

Boys, be ambitious! 「少年よ、大志を抱け!」。内村先生のクラーク先生はまた僕の大先生である。近代青年の享樂主義にあらずんば、やけ、屈従、叛逆などの現代社会破滅状態に対する真剣ならざる反抗である。そして青年は第一たるその義務を果たして居ない。真剣なるこの be ambitious を以て、人類のために努めずして青年と云えようか。Christian Love 「基督者愛」のなかに work 「働き」と fight 「闘い」とがある。そして、for God 「神のために」 fear God 「神を畏れよ」である。

○1924年11月15日(土)

晴。氷が張つて居た。霜が降りて居た。天は凜^{りんこ}乎としてその嚴峻を示した。我も天然に和して凜然たるざるを得ず。全日を之、基督の為に、基督の前に。

晴行く空、風ぎ行く夕。夜は、冷寒こそ身には沁め、清澄、イットセルフ「そのもの」である。入浴して帰つて来たのが9時半。

Be ambitious, Tatsuo! My noble and intimate Friend Whitman, guide me next seven days. And let me have thankful Nov. 2gnd, the Sabbath. 「大志を抱け、辰雄よ! わが貴き親しき友ウィットマンよ、わが次の七日間を導け。そして感謝なる11月第2の安息日を持たしめよ」

朝食、1杯、1碗。勉強、朝、30分。

昼食、半杯、1コップ。昼、20分。

晩食、2杯、半量。夕、1時間。晩、3時間。

精神的に基督の御前に右、嚴守すべきこと。然らば神は豊かに報い給わん。願わくは、



行わしめ給え。アーメン。

○1924年11月16日(日)

快晴。神、絶好の小春日和を与え給う。起床7時。朝食を待ち得とびだす。聖書と宗教書を携えて。白菜の波、紺緑色の美わしきよ。瑠璃色にかがやける空、真黒な土、銀色の霜柱、白銀の遠山、ああ自然の美。小児が頬白をとらんと繻^{もち}を枝に塗る。森の中では、数人の童が枯葉をあつめて焚火をして芋を焼く。お伽の国へ行つた様である。清水が滾々と湧くところあり。一汽一声、汽車が来る。大きな原へ出る。楊炎がゆらめく。人影一つだになし。雉声が遠くから響いてくる。あとは寂たり。西の森の端に、満月がかかっている。朝日はうらかに照る。僕一人、きよき自然につつまれて、聖き書を読む。帰寮10時半。午後0時40分の汽車で宣ちゃんと松村へ行く。車中20分、白光の連山、真白、常陸鉾山の白煙雪の如くたなびく。下車、1里の田舎道をただ二人、行く。労働する農夫を見る。一種の尊敬の念と同情の念と、祈りをおくりつつ。小湖畔へ出る。水鳥が鏡の上に2、3羽浮かんでいる。画にかいた様である。何と平和な静かな景色だろう。しばしやすむ。平和な小自然に心をきよめられる。何とも言えないいい気持になつて二人は腰を卸して物語った。聖霊もまた我等の弱きを知りて、言い難き呻きを以て我等のために祈りぬ。

昨晚、洗礼を受けた夢を見た。十字架へ、十字架へ。

それから、海に出でんとて進む。砂丘を松林の間を上り行く。忽然として眼界が開けた。大海、太平洋、海、海！潮風が颯つと面を打つ。偉大なるかな大自然。蒼穹と大海の紺青の色、何たる奥深き色ぞ。私は断然打たれた。二人は上衣を脱いだ。僕は草履を手にして、素足でかけだした。海、海、ただ汀を指して。その歓びは単純なる赤兒の歓びの如く。汀までは4、5丁〔約440×550m〕あつた。随分広い砂原である。仰ぎ瞻、祈りは我が口より迸つた。神よ、願わくはこの大海の如き人物たらしめ給え。神よ、願わくは、この大空とこの大海の如く、清からしめ給え。アーメン。

青、青、僕の大好きな青色の最も生命にあふれたるは今日のこの空とこの海の色であつた。よき散歩をした。大自然は大教師である。ホイットマンを追想した。机上にホイットマンが居る。今このうごく筆の前に。彼の眼は僕に向けられ、彼の顔は僕にほほえむ如く。「ビーアンビシアス」。クラーク先生、内村先生、僕もまた。

東京の方々へ音信を書く。宇都宮の兄へも。彼は今日丁度、2週間の演習を終えて帰られたのである。兄上の御奮闘、彼の故に、共に感謝す。而して、益々、健康の与えられんことを神に祈り奉る。祈りたきこと、書きたきこと多けれど今晚はこれにて筆をとどむ。神よ、生き生きした、神の真の戦士たらしめ給え。私は神の器なり。アーメン。感謝のみ。



○1924年11月17日(月)

晴。汝、再びあやまつ勿れ。このあやまちを再びする勿れ。主は、厳しく罰し給う。我は、ただ主にのみたよりて。基督者なる以上、その如く歩めよ。蛇の如く智く、鳩の如くすなおなれ。汝の光を輝かせ。ビー・アンビシヤス、辰雄。ビー基督者、辰雄。

○1924年11月18日(火)

晴。この頃の恵まれたる天気を見ては、田舎と自然を益々、讃美せざるを得ない。語学は毎日毎日、グングンやるべきものである。急造は到底能わざるものである。選ばれたる人、辰雄よ。汝はかたく兄上政美のあとをあゆめよ。高島の伯母^{ママ}様の御志^{おこころ}を胸に蔵めよ。在ます母上様、兄上様、姉上様と相愛し、相敬してよきホームをうちにもちて渡れよ。汝の今までの罪は如何に大なるも如何に多くあるとも、総て主によりてあがなわれたるなり。選ばれたる人、辰雄よ、さらば、

「エホバに感謝せよ、エホバは恵み深し。」(詩篇136・1)〔独文〕

○1924年11月19日(水)

晴。この2、3日は実に暖かくある。独逸語の試験があつた。中位であつた。勉強が足りなかった。

晩、二人の迷える者が人生について議論みたいな、うわごとみたいなことを言っている。彼等に敬神の心なきが故に、彼等はいくらなに言つても迷いに迷いである。密林中で、けんかをしている様なものである。彼等に向かつて、上を瞻よ、首を垂れよ、祈れよ、と云つてやりたくなる。クリスチャニティーである。本当に、僕のこの神よりいただいた心持を全部うちあけて、彼等にもこの歓びを得させたくなつて来た。しかし、彼等はああ。辰雄よ、汝は誠に幸なるものなり。神より恵まれる、このことより幸福なことがあるうか。さらば十分享けよ。汝は毎日の1時間を、神の直接の時間として用い居るや。聖書と宗教書の研究に、信仰の糧を得んために、時を用い居るや。学校のことは忙しい。友達のさまたげは最も大である。始終、遊び友達でがやがやしている。そのため勉強はかたらず。しかれども、これらは理由とならず。励めよ、学べよ、与えられよ、主より。主のことを。主によりて。

僕は誤解されている。桐寮の人々に、もと桐寮に居た人々に。学校の友達に、親類の人々に、誤解されている。また、僕を知らぬものがある。それは、内的変化があまりに急で、あまりに峻烈であるからである。今日の僕を、ある者は、英雄崇拜と云い、ある者は、かたいと云い、あるものは馬鹿にし、あるものは世事をしらぬお坊ちゃんとし、あるものは勉強家とし、あるものは、まだわかいなんて云う。誤解されること、それは僕にとって痛痒を感じることでもなんでもない。誤解するものをして誤解せしめよ。知る人ぞ知る。ただ僕は黙っているばかりである。みだりに人に出さないからである。神がよしと命じ給うとき



には、どんどん口からほとぼしることであろう。強いて黙しているわけでもない。ただ時にあらざるが故に、自然なるが故に。年少にして、知らざるものの如くにて、僕はその実、僕のまわりに居る友達よりも、わかつていると自認してもいい位である。

彼等の言っていることは、その根本に目覚めないが故に、僕の明らかなる神の鏡を以て見れば、いかにあわれむべき、空なる、悲観的、絶望的なことを言っているかが実に、明々白々に見えるのである。

一人は言う、

「イヒ(我)と云うものを本当に作りたいために、知りたいために、表わしたいために、また本当の静かな境地に入りたいために、見得るものは皆、きき得るものは皆、(見得られるだけ、聞き得るだけ)験^ためし得るだけ、あらゆるものをやつて見たい。そして、議論に求めて、ついにある静かなところに達しはしないか」

と。ああ、これを聞いて涙がこぼれる。汝のそのすべての努力は遂に、実を結ばざるなり。築きあげたる楼閣は竟に空中のものならざるを得ないのである。汝は叫ばんその時に、

「ああ、すべて何にもならなかった」

と。知識はそれ自身、死である。汝はかくの如く求めて、水泡に帰せざるを得ず、人生を悲観せざるを得ないのである。汝に告す、

「しずかに仰ぎみよ、内に求めよ、神に帰れ」

ただこれだけである。すべてを棄てよ、ただこれだけである。しかし、汝の知識慾もまた可なり。一人は言う、

「どうせそのうちに死ぬんじゃないか。人に迷惑をかけないで、食うだけの金を作

つて、面白くのんきに暮らして行きやそれが一番いいじゃないか」

と。このなかに、色々のことがふくまれている。一つに、人生悲観、絶望。ちよつと徹底している様で、こんな悲観的な暗黒的な、弱い、薄情的なものはないのである。二人は色々としやべっていた。結局、そのうちに、わけのわからぬことになってしまった。二人は出て行つた。

僕は、こんなあわれな二人の話を聞いて、胸がわるくなりそうになったり、彼等のために泣きたくなったりした。遂に祈つた。そして、聖書を開いた。讃美歌をうたつた。桐寮に居る一人の人は、僕の讃美歌を聞いたかも知れない。どう思ったかしらない。おそらく感じなかったにちがいない。

彼等は到底、僕の今の力では救うことが出来ないが、僕はただ如何に思われるとも、十字架を負いて主に従い、主によりて、主のために歩まんのみである。

○1924年11月20日(木)

晴。午後からは体操だけであつた。バスケットボールは実に面白く且ついい運動である。



1ゲームに8点入れたのには自分ながら嬉しかった。うんと勉強できたのに少々オンチをやって、時間を徒費したのは残念だった。入浴した。11貫20匁だった。12貫をさして勇往邁進である。しかし、急いではならぬ。気にしてもならぬ。その中である。あつくてあつくて、冬の衣なんか着ていられない。珍しい天気である。

○1924年11月21日(金)

晴。今日もまた暖かいこと春の様である。春雨の様な雨が降った。久しぶりの雨で気持ちがよい。僕は断然、睨んだ、本当だ。何を。我が同僚を。何の為に。学問のために。それは語学である。僕は1学期休んだため皆より力が足りない傾向がある。それだからである。こんなことでへこたれない。このやつらである。負けるもんかである。断然、猛烈な勉強をして独逸語と英語なら誰にも負けぬ様になつて見せる。語学で一番になつて見せる。忍べ、努め、辰雄。彼等を征服せよ。神よ、神の御前に^{いつわ}詭りなき日々をおくらせ給え。クリスチャンとなし給え。

○1924年11月22日(土)

晴。午後、一中と野球の仕合をした。6対2で敗れた。メンバーがそろわなかったのと練習が全然ないのが敗因となつたのである。しかし、愉快な午後を送った。渴してカルピスを飲むことコップに2杯。生活の僕と全然反対な人と一緒に暮らすことは辛いことである。おちついた気分をそがれること甚大である。少々桐寮の生活に意義をみとめなくなつて来た。しかし、そこでもお基督者の生活を持して行くのが僕のつとめであるが故に、不平はやはり抱いては決してならない。もう、この頃は心霊第一である。すべての根本は心霊それだけである。心霊が動いたり迷ったり、ざわめいたり、洗われたりしているときは何をしたら駄目である。

きょうは兄上の御命日である。願わくは、天を我が恋人となさしめ給え。

万年筆よ、兄上の万年筆よ。彼は姿を消した。一昨日の午後から。僕は悲しくてたまらない。愛する万年筆よ、何処へ行きし。我が不注意をゆるしてくれよ、万年筆。もう一度おまえの姿を現わしてくれ。万年筆、おまえはどうして僕を棄てた。ゆるしてくれ、もう一度。我は汝をさがしに、くるいかけた。しかしついにおまえは、土の上にも、机の上にも、草の上にも、床の上にも、居なかった。おまえはどこかで我をよんでいるだろう。しかし、我には聞こえない。おまえは今誰に使われている。人に使われて居らざらんことを望む。草の上に眠るなら、我は感謝して神に祈る。

信仰第一、健康第二、学問第三。



○1924年11月23日(日)

晴後曇。新嘗祭。

「³⁰……ああ信仰うすき者よ。³¹さらば何を食ひ、何を飲み、何を著んとて思ひ煩ふな。³²是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は、凡てこれらの物の汝らに必要なを知り給ふなり。³³まづ神の國と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。³⁴この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。」(マタイ6・30～34)

辰雄はそれほどよき信仰の心を戴いて、どうして信仰の実があがらないのであるか。これほど残念なことはない。十字架を仰ぎ瞻て信仰に確く歩めよ、必ず。世の反対と誹謗とを冒し、独り静かに之を行え。内村先生、藤井先生、畔上先生、政美兄。祈祷。

○1924年11月24日(月)

晴、雨、晴。朝、窪島さんで喬さん^{たかし}にお会いした。仙台から突然かえられ、東京に行く途中。

家庭の愛なき者、暖かきホームを有せざる者、それは誠に不幸な者である。人生、幸福の一大要素はたしかにホームである。真のホームである。この点を思うときに僕は僕の家に対して、神様に感謝し奉る次第である。母上様を思え、政美兄上様を想え、龍二兄上様を思え、山本の姉上様を思え。辰雄はいかに迷いたりとも、如何に罪をおかしたるとも、幸なるものなり。恵まれたるものなり、選ばれたるものなり。故に、これらの総ての恩に對して愛を以て、十字架を負いて立たざるべからざるなり。

○1924年11月25日(火)

晴。放課後、リチャード先生御帰国につき送別会があり、同時に新任のステイル先生の就任式があつた。

これは16日に松村海岸へ散歩したとき採りし紅葉〔2種の押葉の貼付あり、一つは櫟か〕。リチャード先生の別辞に対して僕は心中、涙なきを得なかった。僕は一回も聴講はしなかったが、今日のお話して。先生の畏神ある人であることを知った。初めて知ってそれで別れた。我が精神は、神の義と愛とに注がれんことを。マタイ伝6ノ31、34である。

○1924年11月26日(水)

晴。

「²²心のたのしみは良薬なり、靈魂のうれひは骨を枯す」(箴言17・22)〔独文〕
昨夜就寝のおそかったのと、時計のとまっていたのとで今朝は、桐寮の総寝坊。8時5



分前に起きた。雨戸も開けず、床も上げず、朝食も認めずに飛びだした。ただ、口と顔だけは洗って行った。夜、団君が遊びに来た。10時頃、寒さと空腹を憶えて、皆で焼芋を食べた。4度飯の様なもの。お芋はごはんとおんなじ。バターを付けて食べる。実にうまい。うかうかしていると大変だ。今月の4日間も大切だ。勉強しよう。

○1924年11月27日(木)

晴。午後からは体操ばかり。夜は友達と一緒に勉強した。久しぶりで甘酒を飲む。

○1924年11月28日(金)

晴。今日も先生休み。午後からは遊び。夜また勉強する。焼芋が非常に甘い。風月も紅谷も及ばない。グンデルト先生、この頃は自転車で通われる。あの年になっても熱心というものは驚くべきもので、ちつとも乗れなかった自転車に、すぐ乗れる様になったのである。先生のあの勤勉はどこから来ているのであるか。それは普通の日本人の考えられぬものがそこにあるのである。神による力、これがなくてあの意気とあの活発とあの歓喜があらうか。基督者生活を送るものの如何に幸なることよ。

「われ山にむかひて目をあぐ わが扶助はいづこよりきたるや。² わがたすけ

は天地をつくりたまへるエホバよりきたる」(詩篇121・1・2)〔英文〕

○1924年11月29日(土)

快晴。母上様から誠に有難き御手紙を戴いた。感激したのである。午後、散歩をした。夕飯は一人であった。6時すこしすぎ出掛けた。町をずーっと通って行った。この辺だろうと思って左へ曲がった。四つ角へ出た。わからない。どこに水戸日本基督教会があるか。そこで人に聞いた。すぐそばにあるのに気づかなかった自分のオンチにおかしかった。でも迷わずに、人に聞いてよかったと思った。よくもかし、こんなに偶然に、はやくも来得たものである。やはり僕を導いてくださったものあることを直感して、実に有難かった。教会の中にはまだ7、8人しか居ない。20、30分待った。小さな教会は丁度一杯になった。高倉氏の「基督教生命観」という講演であった。題は、神学くさくて、どうかと思ったが、その熱烈と、神学くさくなく、あくまでも永遠の生命欲求なりしこととのために、僕は動かされた。実に、よきことをした。感謝であったと思った。否、今晚の御講演は僕を特別に打ったものである。神は彼をして僕を叱し、以て悔改に至らしめ給うたのである。信仰の復興をなさしめ給うたのである。塩である。良書、講演は、誠に我が生活の塩である。友とのダベリ、享樂のことは腐らすものである。我は後者を棄てて、あくまでも前者を望み求むべきである。

帰途、12、13才の女の按摩に遭った。彼女は言っている、「アンマー上下、20銭」。彼女は



足袋も穿いていない。両眼失明している如くある。杖をついている。僕は忽ち憐憫の念に炎えて、彼女に恵まざるを得なくなった。20銭銀貨が丁度あったので、それを

「これをやるからおとり」

と云つて差し出した。彼女は驚いた様であつた。

「いりません、いりません」

と云つた。しかし僕は云つた

「僕はもんで貰つたんだからそのつもりでとつてくれ」

と。すると彼女はいかにも有難そうに

「ありがとうございます」

と、眼えざるものに向かつて見た。僕はどうして涙がうかばずに居られたろう。神に、彼女のために祈つた。

題は「基督教生命観」。印象に残っているものを書く、それから僕の感想も交えて。人には二つの大きな欲求がある。一つは、人格的、絶対的、崇高なものを求むるもの。他は、現世的、刹那的、享樂的な欲求（むしろ欲望）これである。而してこの後者が常に我々の生活に於て、我々をひきまわしめ、目を眩ましむるものである。我々は後者に従つて生活をなすとき、我々是我々の生命それ自身を亡し、生命それ自身に罪をおかしているものである。天を仰がず眼前の些々たる利害にのみ眼をくれて、それに動かされて日々を暮らすときに、我々は自己を滅ぼし、神のこの器をけがし、他人に対するはおろか、己れ自身に罪をおかしているのである。このことを聴くときに誠に僕は思ひ半ばにすぐるものあつて、自ら低頭、神にその罪の赦しと救を祈り奉つたのである。若しゆるすならば僕はそのとき、高らかに呼んだであらう。

「我こそは罪人の首なり。^{かしら}ああ我迷える者なる哉」

と。深刻なる熱涙は流れ出づるばかりであつた。

北独逸、蘇蘭土の人は実に嚴なる峻なるところあり。人格的欲求に燃えている。彼等の内的精神には確然なものがある。見よ、歴史はそれを証明するに非ずや。蘇蘭土より出でたる偉人を見よ、北独逸より出でたる偉人を見よである。而して佛蘭西は如何に。日本は如何に。その惰性的生活に良心は麻痺しているではないか。氣候の左右するところまた一理なるも、人というものはかくの如くして可ならんやである。

祈りて、蚊にひどく血を吸われたとき、受けたるインスピレーションの實驗の話。「キリストは生命のパンなり、泉なり」、永遠の實在、絶対的の生命は何であるか。それは、「救主キリスト・イエスの十字架」を信するによつて得られる、「愛」である。我々はいかに迷ひましても、十字架を仰ぎ瞻て信ずるときに、その絶大なる愛によつて救われ、眞の生命を獲得するのである。

自己の生命、隣人の生命、それは十字架の愛によつて初めて救われるのである。もう何



も云う必要はない。ただ十字架である。マルコ伝8章33節より38節までを熟読して、アメンと云うのみである。

汝等、耐え忍びて汝等の生命を獲得すべし。

水戸日本基督教会なるところへ行つたのは初めてである。讃美歌はその印刷物に、95、100、170、208、233、235、249、264、280、284、460、462が載っていた。今晚のは、100、170、233、249、462であった。

○1924年11月30日(日)

晴、風、暖気。昨晩は1時まで心霊学問の怪談をなした。精神が妙に興奮して、こんなことはあまりすべきことにあらずと思つた。妄である。しかし、仲々面白いこともあつた。「コックリさん」とか、「トランプ」のとき妙な現象のあつた実験談とか、机が上つたり、ヴァイオリンが上つたりすることや、四次元の世界とか、死者との会話とか、それからそれから不思議な話が出て、現代の科学では解明の出来ないことの実に多くあつて驚いた。心霊の力とは実に大なるものなるをつくづく感じたのである。

午後、富山のところへ話しに行つた。僕の友である。帰りに畠で小鳥をつかまえた。可愛そうに、背中を外の禽にこつかれたと見えて、目を白黒させていた。

小さき鳥よ、汝は汝の背中の中の傷をどこで得た。我、汝を畠に捕りしとき汝は戦えていた。暖めてやって汝はやや甦りたるが如し。汝は幸にも甦りたり。汝は飛びたり。汝は自由の野に帰れり。神この小さき鳥の傷を治し給え。傷を与えし猛禽か、あやまれる同僚をあわれみ給え。而して彼等禽の間にも平和を齎し給え。アーメン。「小鳥(雀?)のスケッチあり」

晩に非常になまあたかく、風が吹いて気持がよくなかったが、植村さんの講演は聞きたいので行つた。宣ちゃんも行つた。富山が来た。教会の形式にしたがつてした。題は「基督教神観」と云う。前提が長すぎて肝腎な本論のはなはだ力弱かりしを遺憾に思つた。自身もそう言われた。昨晩の講演の方がはるかに熱があつた様に想う。尤も年輩の数量、人の性質にもよるが。とにかく植村さんなる人を知つたのは、はからざることであつた。しかし、この集いも機会の少ない水戸のことだから、恵まれたものである。教師が閉会にあたつて言ったことが氣にくわない。教会経営者の側だから仕方がないとは思つたが、いや味があつた。

凡そ人は、美の観念、正邪善悪の観念を有す。しかして、最も大切なものが一つ残っている。それは、敬虔、謙讓、感謝の念である。この間、僕は作文で現代青年に対する「宗教の必要」を論じた。就床11時。

